

特集

門野編集長の褥瘡学会を そ〜っと覗いてみてごらん

羅針盤

まるごと褥瘡



門野 岳史

Kadono Takafumi

聖マリアンナ医科大学皮膚科
主任教授

Visual Dermatology 編集委員長

2025年8月29・30日にかけて、第27回日本褥瘡学会学術集会を主催させていただきます。この学会に合わせて褥瘡の特集を出すところまでよいのではないかと目論見で、安部正敏先生の多大なる協力を仰いで本特集を作成しました。

褥瘡は予防対策が整えられたことで、病院ではかなり発生率が少なくなってきました。そろそろ限界という感じもあり、近年では防ぎきれない褥瘡である不可避褥瘡という概念も広まってきました。在宅に関しても日本褥瘡学会が中心となった取り組みにより、発生率は徐々に低下しています。しかしながら、医療資源の問題や医療や介護の仕組みの問題もあり、網の目からこぼれおちている患者さんが一定数いるのも事実です。

褥瘡はまず発症要因を理解することが必要で、単に垂直方向の体圧のみによって生じるわけではありません。また、褥瘡は皮膚潰瘍の一種ではありますが、他の熱傷潰瘍などとは大分性質を異にします。褥瘡の発症要因を理解し、危険因子を正しく評価することが予防と治療の出発点になります。Part 1では最近の知見を踏まえて、褥瘡の発生要因とリス

ク評価、褥瘡自体の評価法、急性期と慢性期における褥瘡の局所治療、体圧分散などについておのおのまとめていただきました。

褥瘡治療は多職種連携の先駆けといわれます。多くの病院では多職種からなる褥瘡対策チームが設けられ、褥瘡対策専任看護師を中心としておのおのの専門家が独自の役割を果たすことが目標達成につながります。Part 2ではそうしたなかで各専門職がどのような役割を果たしていくかに関して、事例をまじえながら解説していただきました。

Part 3では褥瘡にまつわるトピックスをいくつか取り上げてみました。医療関連機器褥瘡は最近名称が医療関連機器圧迫創傷から変わりました。特定機能病院などでは、医療関連機器褥瘡はいわゆる通常の褥瘡である自重関連褥瘡に匹敵するくらい多く発生しています。医療関連機器褥瘡の原因となる医療関連機器は多様ですが、多くの事例は防ぐことが可能であり、対策に力が入れている分野になります。褥瘡の局所治療のポイントとして、外用薬以外を駆使することがあげられます。外用薬とドレッシング材の使い分け、陰圧閉鎖療法の活用の仕方、バイオフィームと闘い創面を清浄化し滲出液をコントロールする手段などを盛り込み、日常診療に活用していただくことを狙いました。最近話題となっているアスリート褥瘡についても触れ、車いすアスリート特有の問題について解説いただきました。褥瘡を科学することも重要です。褥瘡研究や新しい治療法に関して執筆いただき、未来へ向けたメッセージも届けたいと思います。

本特集で、褥瘡のトピックスはほぼ網羅でき、全体としてコンパクトにまとめられたのではないかと思います。この1冊が皆様の褥瘡対策に役立つことを心より願っています。